

9 活況を呈する埼玉、千葉、神奈川3県

埼玉には実績15年のあやめ保育園

南埼玉郡菖蒲町のあやめ保育園は、昭和43年秋から漢字教育を開始しました。石井方式実践の第一号、大阪・小路幼稚園に遅れることわずか数か月という古くからの実践園として知られています。

現在75歳になる園長の寺田新先生の熱意ある指導のもとに、これまで変わることなく漢字教育を行なってきましたが、子どもたちは一様に、集中力が身につくクラスにまとまりができて、外遊びも活発になるという良い結果をもたらしているそうです。

あやめ保育園の熱心さは、次のことでもよくわかると思います。それは、石井先生に、毎年一回必ず来園してもらい、園児の父兄、及び地域の人々に対する「授業教育講演会」を開催していることです。昭和58年までに15回を重ねました。1園で催された石井先生の講演会の回数では、これが最高記録となっているほどです。

石井先生も「毎年その講演の時期が近づくと、寺田園長からの御依頼の電話が待遠しいほどです。ここまですると、御依頼のある限り、どんなに多忙になろうとも、お応えしなければ相済まないという思いで一杯です」とこの講演会には大変な思い入れがあるようです。

寺田先生はなぜ石井方式を実践しているかについて、「石井方式は真理であるから、園児に最良の幼児教育をそれでやるのだ」とズバリ断言しました。

八潮市にある八潮学園は、昭和54年から漢字教育を始めました。当初は「なんであんなむずかしい漢字を教えるのか」との批判もありましたが、今はほぼ聞くことがないと園長の内田トキエ先生は語って

います。

三歳児から、週3回、1日十分ぐらいずつ漢字絵本などを利用し実施しているそうで、時には諺カルタ、俳句カルタも使い、フラッシュカードだけは毎日読ませるというカリキュラム。「園内のロッカーやくつ箱に貼る名札も全部漢字を使用しているため、すぐに判別がついて、玄関で混雑したりすることがなくなり、また、子どもたちが知的になってきたためか、けんかをしたり、ケガをすることも少なくなりました」と内田先生はその効用のほどを説明しています。

この他、八潮市内では、潮止、第二潮止幼稚園などで実践されています。

浦和市内では淑徳与野幼稚園が漢字教育を3年前から実施、今では約250人の園児がこれを受けているところです。この浦和市には私立の幼稚園が50園以上ありますが、漢字教育は、淑徳与野幼稚園だけのようで、まだまだ普及拡大の余地はいくらもあると思われます。

埼玉県内では、これらの幼稚園のほかにも、越谷市のアスナロ、松沢、大袋の各幼稚園、春日部市の豊春幼稚園、飯能市の大東幼稚園、岩槻市の若葉幼稚園などが、ズラリ歩調を合わせて漢字教育の真最中といったところです。

47年から導入のコスモス幼稚園、論語のたきのい幼稚園など

千葉県の現状

コスモス幼稚園は船橋市内にあって、昭和47年度から漢字学習を採用しています。園児数230余名で7クラス。実施方法は、まず三歳児には、身近な具体物を漢字で示し、とくに“同類”の漢字の発見を促します。四歳児になると、次第に、具体物から抽象的なものの漢字

を増やし、同時に形容詞、動詞なども組み入れていくようにし、五歳児では、文章化能力を高めるため、「桜が咲く」といった例のように、ルビを用いながら、ひらがなも一部導入する方式で、漢字学習をより豊かなものにする段階を踏んでいくようにしているそうです。

子どもたちは、たとえば「梅、桃、桜、梨」といった漢字を見て、「木」という字がどれにも含まれているから「木の仲間だよ」と、おのずから、より高度の概念を把握できるようになるとのことです。

園長の戸村静江先生は「教師の側が理解し実施するまで、2年の年月を要しました」といいますが、現在はもちろん順調なペースで進んでいるといえます。

市原市にもいくつかの実践園があり、さなぎ幼稚園もその一つです。290名近い園児がいますが、一般的に出生率の低下とともに園児数は減少していく現象があるにもかかわらず、ここは増加傾向を見せています。これも、石井方式の実践ゆえなのかも知れません。

千葉市はさすがに人口も多く、従って幼稚園の数も多いため、実践園は10園近くになりそうです。10年ほど前から早々と石井方式に取り組み、現在約280名の園児が漢字で学習している院内保育園や、市内でも、その熱意ある指導に定評を得ているひまわり幼稚園と第二まこと、第三まこと幼稚園(第一は八千代市で実践中)など目白押しです。

船橋市のたきのい幼稚園は、例年70頁ほどの、りっぱな「漢字教育実践記録」を出しているところです。その57年版によりますと、石井方式の採用に踏み切った54年ごろの戸惑い(とくに先生方にとって)などがその記録には率直に書かれています。「漢字が“かなよりも

やさしく覚えやすい」という石井先生のお話はあまりにも夢のようだった。「石井先生の講演を3年前に初めて聞いた時には、幼児に漢字が読めるということさえ驚きであった」という感想があちこちに語られています。

しかし、「本を大切にすると本好きな子どもになったのはうれしいことである」「芭蕉の句を提出すると意味の解釈をする子どもまで現われた」「子どもたちは漢字が大好きである。子どもたちに漢字を提出すると、『見なさい』と強制しなくても注目する」といった風に、子どもたちがドンドン成長していくさまを現実に経験すると、「今では、漢字教育を当たり前のこととして行なっている自分の姿に驚いている」とまで確信を持って指導に当たるようになっていくのです。

たきのい幼稚園では、論語にも取り組んでいます。論語に造詣の深い園長の越川春樹先生の指導のもと、昭和57年から実施していますが、「論語までやるのか」という大人たちの反応とは別に、越川先生によれば「論語などは子どもが一番好きで、昼休みや放課後、先生の指棒をうばい合って互いに得々と語り合っている」ほど、子どもたちの心をとらえているそうです。園児の喜々として漢字とたわむれる姿が目に見えそうです。

千葉県では、ほかに、四街道市の銀の鈴幼保育園、我孫子市の布佐台幼稚園、海上郡海上町のうなかみ幼稚園など多彩な実践園が活躍中です。

川崎のひかり幼稚園を筆頭に多土多済の神奈川県

神奈川県では、まず筆頭にあげられるのが、昭和43年から開始した川崎市のひかり幼稚園でしょう。現在では、同市内にある第一と第

二の両園で合わせて約700名近い園児が実践中です。

園長の吉田尚弘先生は、当時を振り返って、「父兄はもちろん、教師の方も、保育の学校で漢字学習のことなど教育を受けておらず、逆に幼稚園での文字教育はいけないものという考え方が強かったため、反対者がたくさんいたものです。それに、そのころは、教材も全くなく、暗中模索で、漢字カードと絵を合わせるようなものをつくったり、“漢字の泉”と名づけて、箱のなかに、2、3センチ角のカードに名詞類の漢字を印で捺し、数多く入れておいて、そのなかへ子どもたちが手を入れて一つずつ取り出し、読めたら子どもにあげるなどいろいろと工夫しました。この“漢字の泉”はいまでもやっています、子どもにはなかなか好評ですけど……」

現在とはまさに雲泥の差がありますが、当時の“草分け”的存在であった幼稚園は、このひかり幼稚園に限らず同じような苦心を重ねてきたわけです。

ところで、こうした園児たちへの漢字教育の指導が、どんな形で良い結果をもたらして来ているかについて、吉田先生はこう語っています。「一般的な傾向としては、まずIQが高くなったことですね。入園前の平均指数は、100ぐらいですけど、漢字学習を実施しますと、平均130、年によっては年長児の平均が140ほどになったこともあります。もちろん本好きの子どもになり、推理力、判断力が向上して、いろいろな面でものすごく意欲的になります。卒園して小学校へ上がっても、社会性が出てきて友だち関係もうまくなり、授業内容がよくわかるため、国語はもちろんですが、算数や理科、社会科などが得意になる子どもが多いですね」

そのほかに、吉田先生が強調していることがあります。それは、何

といっても、同音異義語の多い日本語を、正しく理解するためには漢字の使用が不可欠になるし、ものごとを正確に認識することに、ひらがなばかりだと、弊害が出て困ってしまうという点です。これについては、吉田先生が雑誌「漢字漢文」の昭和47年第十号に書いた文章がありますので、その一部を引用してみましよう。

「……さて、物事の正しい認識をさせなければならない幼児期に、ひらがなの弊害があつては、誠に困ります。事実、その困った問題が、あちこちで数多く見受けられるのです。たとえば、あるおかあさんが、『うさぎおいし、かのやま……』と、かなの歌詞を子どもに見せながら、歌って聞かせました。すると子どもが聞いて、『おかあさん！ぼく兎って食べたことないけど、そんなにおいしいの？』……。

私どもの園歌の歌詞に、『にこにこ笑顔のお友達……』とあります。5、6年前でしたが、かなで『えがお』と示し、何のことか園児に問い質してみると、『先生それはね、絵に描いた顔だよ』と答えました。この子は、ひらかたを全部読める子どもでした。漢字で園歌を示している歌詞では、どの園児に聞いても、すぐ『笑っている顔です』という答えがはね返ってきます。(中略)

せっかくのすばらしい情緒が、正しく伝わらないことは、本当に残念なことです。ひらがなだけの歌詞は、時々弊害を起こします。(以下略)」

たとえば、かなだけの絵本は大人にも(だから?)読みにくいことこの上ありませんが、これなども吉田先生の指摘する“弊害”から生じることを端的に示しているといえるでしょう。

ひかり幼稚園は、漢字学習はもちろん、一日の園内での生活を子

どもたちが裸で過ごす「裸教育」でも有名です。“裸と漢字のひかり幼稚園”なんてキャッチフレーズをつけられることもあります。文字通り、子どもたちは、ここで“心身”をきたえているようです。

さて、川崎に隣接する横浜市を見てみますと、ここでも10園近くが漢字教育を実践しています。中でも港北区の城郷幼稚園は10年以上の歴史を持っています。園長の安藤仁雲先生によれば、幼稚園での幼児は、すべて遊びの連続であると考え、漢字学習も“漢字遊び”と名づけています。

はじめたころには、ひかり幼稚園を全職員で見学し、また石井先生の公開授業を父兄とともに参観し講演を聞いたりしました。そして新しい教育方法としての漢字学習の必要性を十分理解した上で、開始したため、その結果は予期していたように、園児の目は輝き、漢字遊びを楽しむ様子は指導に当たった先生方も驚くほどだったといえます。

同市内の鶴見区では、やよいが丘幼稚園が、昭和49年のスタートと、かなり以前から漢字学習に取り組んできました。園長の原ミネ先生によりますと、ある講習会に参加して石井方式を知り、賛同してすぐに採用に踏み切ったといえます。父兄からはそれほど強い反対はなかったけれども、逆に教師の側のとまどいが強く、ほとんどのいやいやながらやり始めたとのことですが、実施してみると、子どもたちが強い意欲を示し、また反応が素早く、園児に教師が押しまくられた格好で続けるようになったそうです。これまでの卒園生たちの動向はどうかと聞いたところ、小学校の生活にスムーズに溶け込んで余り手がかからなくなり、集中力が出てきたと父兄は喜んでいるといえますから、あちこちの実践園で聞かれた成果がここでもはっきり表われています。

川崎、横浜以外では、横須賀、三浦、南足柄、相模原、伊勢原とい

った各市にも実践園が点在しています。そのなかのいくつかを見ますと

横須賀市太田和の新興住宅地域にある相武幼稚園は、石井方式を幼児教育のパイオニアと位置づけています。また様々な教育の原理を模索している全国の団体、研究グループにも参加しつつ、石井方式を昭和53年から実践し、大きな成果を上げています。漢字絵本フラッシュカードを始め、百人一首の暗唱なども試みるとともに、他の知育方法と一体化させた形で漢字学習を進めています。

三浦市の市街地には徳風幼稚園が、昭和56年に“トライアル”をし、翌57年の4月から本格的に漢字教育を始めました。現在、園児数は約120名というところですが、実は近隣幼稚園では、このところ、のきなみ園児減に悩まされているのに、ここでは、逆に増えているといえます。その理由として、「やはり口コミで伝わった石井方式についての評価が高いことの表われかも知れません」と、稲垣英夫理事長の弁です。

伊勢原市にもまた昭和57年に石井方式採用と、新しい実践園に数えられる立正幼稚園があります。大きな絵文字カード、漢字カード、それから運動と漢字とを結びつけたり.....ハラエティに富んだ方法を考案、実行しようという意欲にあふれる幼稚園です。

以上、神奈川県内の実践園をごく手短かに素描してみました。いずれの園も、園児はもちろんのこと、父兄、先生方ともども意欲に溢れた積極的な取り組みを見せているのはいうまでもありません。